033

日蓮大聖人御書全集

法華経題目抄（ほけきょうだいもくしょう）

（妙の三義の事（みょうのさんぎのこと））

新版531～543

法華経題目抄（妙の三義の事）

文永3年(’66) 1月6日 45歳

根本大師門人日蓮撰す。

南無妙法蓮華経

問うて云わく、法華経の意をもしらず、ただ南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんど唱えても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。

答(こた)えて云(い)わく、しかるべきなり。

問(と)うて云(い)わく、「火(ひ)、火(ひ)」といえども、手(て)にとらざればや焼(ひ)けず、「水(みず)、水(みず)」といえども、口(くち)にのまざれば水(みず)のほしさも止(や)まず。ただ南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と題目(だいもく)ばかりを唱(とな)うとも、義趣(ぎしゅ)をさとらずば、悪趣(あくしゅ)をまぬかれんこと、いかがあるべからん。

答(こた)えて云(い)わく、師子(ししの)筋(すじ)を琴(こと)の絃(げん)として一度(いちど)奏(そう)すれば余(よ)の絃(げん)ことごとくきれ、梅子(うめのみ)の酸(すい)き声(こえ)を聞(きけ)ば口(くち)につたまり唾溜(つばたま)りうるおう。世間(せけん)の不思議(ふしぎ)すら、かくのごとし。いわんや、

法華経の不思議をや。小乗の四諦の名ばかりをさやずる鸚鵡、なお天に生ず。三帰ばかりを持つ人、大魚の難をまぬかる。いかにいわんや、法華経の題目は八万聖教の肝心、一切諸仏の眼目なり。なんじ、これをとなえて四悪趣をはなるべからずと疑うか。

正直捨方便の法華経には「信をもって入ることを得たり」と云い、双林最後の涅槃経には「この菩提の因はまた無量なりといえども、もし信心を説かば、則ちすでに摂め尽くす」等云々。

夫れ、仏道に入る根本は信をもって本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たとい解さとりなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たとい解さとりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者なり。

善星比丘は二百五十戒を持ち、四禅定を得、十二部経を諳にせし者。提婆達多は六万・八万の宝蔵をおぼえ、十八変を現ぜしかども、これらは有解無信の者。今に阿鼻大城にありと聞く。迦葉・舎利弗等は無解有信の者なり。仏に授記を蒙って、華光如来・光明如来といわれき。仏説いて

云わく「疑いを生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に堕つべし」等云々。これらは有解無信の者を説き給う。

しかるに、今の代に世間の学者の云わく「ただ信心ばかりにて解する心なく、南無妙法蓮華経と唱うるばかりにて、いかでか悪趣をまぬかるべき」等云々。この人々は、経文のごとくならば、阿鼻大城まぬかれがたし。

されば、させる解りなくとも、南無妙法蓮華経と唱うるならば、悪道をまぬかるべし。譬えば蓮華は日に随って回る。蓮に心なし。芭蕉は雷によりて増長す。この草に

耳なし。我らは蓮華と芭蕉とのごとく、法華経の題目は日輪と雷とのごとし。犀の生角を身に帯して水に入りぬれば、水五尺、身に近づかず。梅檀の一葉開きぬれば、四十由旬の伊蘭を変ず。我らが悪業は伊蘭と水とのごとく、法華経の題目は犀の生角と梅檀の一葉とのごとし。金剛は堅固にして一切の物に破られず。されども羊の角と亀の甲に破らる。尼倶類樹は大鳥にも枝おれざれども、かのまつげにすくうしょうりょう鳥に枝おれぬ。我らが悪業は金剛のごとし、尼倶類樹のごとし。法華経の題目は羊の角のごとく、しょ

みみ　われ　れんげ　ばしょう　ほけきょう　だいもく　にちりん
いかずち　さい　いきつの　み　たい　みず　い
みずごしゃく　み　ちか　せんだん　いちようひら　しじゅうゆじゅん
いらん　へん　われ　あくごう　いらん　みず　ほけきょう
だいもく　さい　いきつの　せんだん　いちよう　こんごう　けんご
いっさい　もの　やぶ　ひつじ　つの　かめ　こう　やぶ
にくるじゅ　おおとり　えだ　折　蚊　睫　巣
鵰　鷲　ちょう　えだ　われ　あくごう　こんごう
にくるじゅ　ほけきょう　だいもく　ひつじ　つの

うりょう鳥のごとし。琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。我らが悪業は塵と鉄とのごとく、法華経の題目は琥珀と磁石とのごとし。かくおもいて、常に南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべし。

法華経の第一の巻に云わく「無量無数劫にも、この法を聞くこともまた難し」。第五の巻に云わく「この法華経は無量の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」等云々。法華経の御名をきくことは、おぼろけにもありがたきことなり。されば、須仙多仏・多宝仏は、世にいでさせ給い

たりしかども、法華経の御名をだにもとき給わず。釈迦如来は、法華経のために世にいでさせ給いたりしかども、四十二年が間は名をひしてかたりいださざりしかども、仏の御年七十二と申せし時、はじめて妙法蓮華経ととなえいださせ給いたりき。しかりといえども、摩訶尸那・日本等の辺国の者は御名をもきかざりき。一千一十余年すぎて三百五十余年に及びてこそ、わずかに御名ばかりをば聞きたりしか。

されば、この経に値いたてまつることをば、三千年に

一度花さく優曇華、無量無辺劫に一度値うなる一眼の亀に
もたとえたり。大地の上に針を立てて、大梵天王宮より芥子
をなぐるに、針のさきに芥子のつらぬかれたるよりも、
法華経の題目に値うことはかたし。この須弥山に針を立て
て、かの須弥山より大風つよく吹く日いとをわたさんに、
いたりてはりの穴にいとのさきのいりたらんよりも、
法華経の題目に値い奉ることかたし。されば、この経の
題目をとなえさせ給わんには、おぼしめすべし、生盲の始
めて眼あきて父母等をみんよりもうれしく、強きかたきに

捕　許　珍
とられたる者の、ゆるされて妻子を見るよりもめずらしと
思
おぼすべし。

問うて云わく、題目ばかりを唱うる証文これありや。

答えて云わく、妙法華経の第八に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」。正法華経に云わく「もしこの経を聞いて、名号を宣持せば、徳は量るべからず」。添品法華経に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」等云々。これらの文は、題目ばかりを唱うる福、計るべからずとみえぬ。一部八巻二十八品を受持・読誦し、

随喜・護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、となうる者を護持するは要なり。広・略・要の中には題目は要の内なり。

問うて云わく、妙法蓮華経の五字には、いくばくの功徳をかおさめたるや。

答えて云わく、大海は衆流を納めたり。大地は有情・非情を持てり。如意宝珠は万財を雨らし、梵王は三界を領す。妙法蓮華経の五字、またかくのごとし。一切の九界の衆生

ならびに仏界を納む。十界を納むれば、また十界の依報の国土を収む。

まず、妙法蓮華経の五字に一切の法を納むることをいわば、経の一字は諸経の中の王なり。一切の群経を納む。仏世に出でさせ給いて、五十余年の間、八万聖教を説きおかせ給いき。仏は人寿百歳の時壬申歳、二月十五日の夜半に御入滅あり。その後、四月八日より七月十五日に至るまで一夏九旬の間、一千人の阿羅漢、結集堂にあつまりて一切経をかきおかせ給いき。その後、正法一千年の

間は、五天竺に一切経ひろまらせ給いしかども、震旦国には渡らず。像法に入って一十五年と申せしに、後漢の孝明皇帝・永平十年丁卯歳、仏経始めて渡って唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午歳に至るまで、渡れる訳者一百七十六人、持ち来る経・律・論一千七十六部五千四十八巻四百八十帙。これ皆、法華経の経の一字の眷属の修多羅なり。

まず、妙法蓮華経の以前四十余年の間の経の中に、大方広仏華厳経と申す経ます。竜宮城には三本あり。

上本は十三世界微塵数の品。中本は四十九万八千八百偈。下本は十万偈四十八品。この三本の外に震旦・日本にはわずかに八十巻・六十巻等あり。阿含の小乗経、方等・般若の諸大乗経等、大日経は、梵本には阿嚩囉訶佉の五字ばかりを三千五百の偈をもってむすべり。いわんや、余の諸尊の種子・尊形・三摩耶、その数をしらず。しかるに、漢土にはただわずかに六巻・七巻なり。涅槃経は双林最後の説、漢土にはただ四十巻、これも梵本これ多し。これらの諸経は皆、釈迦如来の説くところの法華経の眷属の修多羅なり。

この外、過去の七仏・千仏、遠々劫の諸仏の所説、現在十方の諸仏の説経、皆、法華経の経の一字の眷属なり。

されば、薬王品に、仏、宿王華菩薩に対して云わく「譬えば、一切の川流江河の諸水の中に海はこれ第一、衆山の中に須弥山はこれ第一、衆の星の中に月天子は最もこれ第一なるがごとし」等云々。妙楽大師、釈して云わく「已今当の説に最もこれ第一なり」等云々。この経の一字の中に十方法界の一切経を納めたり。譬えば、如意宝珠の一切の財を納め、虚空の万象を含めるがごとし。経の一字は

一代に勝る故に、妙法蓮華の四字もまた八万法蔵に超過するなり。

妙とは、法華経に云わく「方便の門を開いて、真実の相を示す」。章安大師、釈して云わく「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。妙楽大師、この文を受けて云わく「発とは開なり」等云々。妙と申すことは、開ということなり。

世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかたし。開かざれば、蔵の内の財を見ず。華厳経は、仏説き給い

たりしかども、経を開く鑰をば、仏彼の経に説き給わず。阿含・方等・般若・観経等の四十余年の経々も、仏説き給いたりしかども、彼の経々の意をば開き給わず。門を閉じておかせ給いたりしかば、人、彼の経々をさとる者一人もなかりき。たといさとれりとおもいしも、僻見にてありしなり。しかるに、仏、法華経を説かせ給いて、諸経の蔵を開かせ給いき。この時に四十余年の九界の衆生、始めて諸経の蔵の内の財をば見しりたりしなり。

譬えば、大地の上に人畜・草木等あれども、日月の光な

ければ、眼ある人も人畜・草木の色かたちをしらず、日月いで給いてこそ、始めてこれをばしることには候え。爾前の諸経は長夜のやみのごとし。法華経の本迹二門は日月のごとし。諸の菩薩の二目ある、二乗の眇目なる、凡夫の盲目なる、闡提の生盲なる、共に爾前の経々にてはいろかたちをばわきまえずありしほどに、法華経の時、迹門の月輪始めて出で給いし時、菩薩の両眼先にさとり、二乗の眇目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の一闡提、未来に眼の開くべき縁を結ぶ。これひとえに妙の

一字の徳なり。

迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合わせて二妙。迹門の十妙、本門の十妙、合わせて二十妙。迹門の三十妙、本門の三十妙、合わせて六十妙。迹門の四十妙、本門の四十妙、観心の四十妙、合わせて百二十重の妙なり。六万九千三百八十四字、一々の字の下に一つの妙あり。総じて六万九千三百八十四の妙あり。妙とは、天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。

妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。法華経の一々

の文字、一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり。譬えば、大海の一滴の水に一切の河の水を納め、一つの如意宝珠の芥子ばかりなるが一切の如意宝珠の財を雨らすがごとし。

譬えば、秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値って、枝葉・華菓出来するがごとし。爾前の秋冬の草木のごとくなる九界の衆生、法華経の妙の一字の春夏の日輪にあいたてまつりて、菩提心の華さき、成仏・往生の菓なる。竜樹菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をもって薬

となすがごとし」云々。この文は、大論に法華経の妙の徳を釈する文なり。妙楽大師、釈して云わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。総じて成仏・往生のなりがたき者四人あり。第一には決定性の二乗、第二には一闡提人、第三には空心の者、第四には謗法の者なり。これらを法華経において仏になさせ給う故に、法華経を妙とは云うなり。

提婆達多は、斛飯王の第一の太子、浄飯王にはおい、阿難尊者がこのかみ、教主釈尊にはいとこ、南閻浮提にかろか

らざる人なり。須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に十八変をならい、外道の六万蔵、仏の八万蔵を胸にうかべ、五法を行じて、ほとんど仏よりも尊きけしきなり。両頭を立てて破僧罪を犯さんために、象頭山に戒壇を築き、仏弟子を招きとり、阿闍世太子をかたらいて云わく「我は仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給え」。阿闍世太子、すでに父の王を殺せしかば、提婆達多はまた仏をうかがい、大石をもちて仏の御身より血をいだし、阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし、五逆の内

たる三逆をつぶさにつくる。作その上、瞿伽利尊者を弟子とし、阿闍世王を檀那とたのみ、頼五天竺・十六の大国・五百の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者、皆、提婆が一類にあらざることこれなし。譬たとえば、大海の諸河をあつめ、集大山の草木をあつめたるがごとし。智慧の者は舎利弗にあつまり、神通の者は目連にしたがい、従悪人は提婆にかたらいしなり。語

されば、厚さ十六万八千由旬、その下に金剛の風輪あるべし、破生身に無間大城に堕ちにき。第一の

弟子・瞿伽梨も、また生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女も
おちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘もおちぬ。またこ
れらの人々の生身に堕ちしをば、五天竺・十六の大国・
五百の中国・十千の小国の人々も、皆これをみる。六欲・
四禅・色・無色・梵王・帝釈・第六天の魔王も、閻魔法王等
も、皆、御覧ありき。三千大千世界・十方法界の衆生も、
皆、聞きしなり。

されば、大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出ずべから
ず。劫石はひすらぐとも、阿鼻大城の苦はつきじとこそ思

い合いたりしに、法華経の提婆品にして、教主釈尊の昔の師・天王如来と記し給うことこそ不思議におぼゆれ。爾前の経々実ならば法華経は大妄語、法華経実ならば爾前の諸経は大虚誑罪なり。提婆が三逆をつぶさに犯してその外無量の重罪を作りし、天王如来となる。いわんや、二逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いなきこと、譬えば、大地をかえすに草木等のかえるがごとく、堅石をわる者軟草をわるがごとし。故に、この経をば妙と云う。

女人をば内外典にこれをそしり、三皇五帝の三墳五典に

諂曲の者と定む。されば、「災いは三女より起こる」と云えり。国の亡び人の損ずる源は、女人を本とす。内典の中には、初成道の大法たる華厳経には「女人は地獄の使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のごとし」と云い、双林最後の大涅槃経には「一切の江河必ず回曲有り。一切の女人必ず諂曲有り」と。また云わく「あらゆる三千界の男子の諸の煩悩を合わせ集めて、一人の女人の業障となす」等云々。

大華厳経の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて候

は、女人は仏になるべき種子をいれり。譬えば、大旱魃の時、虚空の中に大雲おこり大雨を大地に下らすに、かれたるがごとくなる無量無辺の草木、花さき菓なる。しかりといえども、いれる種はおいずして、結句、雨しげければくちうするがごとし。仏は大雲のごとく、説教は大雨のごとく、かれたるがごとくなる草木を一切衆生に譬えたり。仏教の雨に潤い、五戒・十善・禅定等の功徳を修するは、花さき菓なるがごとし。雨ふれどもいりたる種のおいず、かえりてくちうするは、女人の仏教にあいて生死を

離

はなれずして、かえりて仏法を失い、悪道に堕つるに譬うべし。これを「能く仏の種子を断つ」とは申すなり。

涅槃経の文に「一切の江河のまがれるがごとく、女人もまたまがれり」と説かれたるは、水はやわらかなる物なれば、石山なんどのこわき物にさえられて水のさきひるむゆえに、あれへこれへ行くなり。女人もまたかくのごとし。女人の心をば水に譬えたり。心よわくして水のごとくなり。道理と思うことも、男のこわき心に値いぬれば、せかれてよしなき方へおもむく。また、水にえがくにとどま

涅槃経(ねはんぎょう)の文(もん)に「一切(いっさい)の江河(こうが)のまがれる曲(がごとく、女人(にょにん)も
またまがれり」と説(と)かれたるは、水(みず)はやわらかなる軟(物(もの)なれ
ば、石山(いしやま)なんどのこわき強物(障(にさえられて水(みず)のさきひるむ先(ゆ
えに、あれへこれへ行(いくなり。女人(にょにん)もまたかくのごとし。
女人(にょにん)の心(こころ)をば水(みず)に譬(たとえたり。心(こころよわくして水(みずのごとくな
り。道理(どうり)と思(おもうことも、男(おとこのこわき心(こころに値(あいぬれば、せ
かれてよしなき方(ほうへおもむく。また、水(みずにえがくにとどま

らざるがごとし。女人は不信を体とするゆえに、只今さあるべしと見ることも、またしばらくあれば、あらぬさまになるなり。仏と申すは正直を本とす。故に、まがれる女人は仏になるべからず。五障三従と申して、五つのさわり、三つしたがう事あり。されば銀色女経には「三世の諸仏の眼は大地に落つとも、女人は仏になるべからず」と説かれ、大論には「清風はとるといえども、女人の心はとりがたし」と云えり。

かくのごとく諸経に嫌われたりし女人を、文殊師利菩薩

の妙の一字を説き給いしかば、たちまちに仏になりき。あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の弟子・智積菩薩、釈迦如来の御弟子の智慧第一の舎利弗尊者、四十余年の大小乗経の経文をもって竜女の仏になるまじき由を難ぜしかども、終に叶わず仏になりにき。初成道の「能く仏の種子を断つ」、双林最後の「一切の江河必ず回曲有り」の文も破れぬ。銀色女経ならびに大論の亀鏡も空しくなりぬ。智積・舎利弗は舌を巻いて口を閉じ、人天大会は歓喜せしあまりに掌を合わせたりき。これひ

とえに妙の一字の徳なり。

この南閻浮提の内に二千五百の河あり。一々に皆まがれり。南閻浮提の女人の心のまがれるがごとし。ただし娑婆耶と申す河あり。縄を引きはえたるがごとくして、直ちに西海に入る。法華経を信ずる女人、またまたかくのごとく、直ちに西方浄土へ入るべし。これ妙の一字の徳なり。

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。譬えば、黄鵠の子死せるに、鶴の母「子安」となけば、死せる子還って活り、鳩鳥水に入れば、魚蚌ことごとく死す。

犀の角これにふるれば、死せる者皆よみがえるがごとく、爾前の経々にて仏種をいりて死せる二乗・闡提・女人等、妙の一字を持ちぬれば、いれる仏種も還って生ずるがごとし。天台云わく「闡提は心有り。なお作仏すべし。二乗は智を滅す。心生ずべからず。法華能く治す。また称して妙となす」。妙楽云わく「ただ大とのみ云って妙と名づけざることは、一には有心は治し易く、無心は治し難し。治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。これらの文の心は、大方広仏華厳経・大集経・大品経・大涅槃経等は題目

に大の字のみありて妙の字なし。ただ生ける者を治して死せる者をば治せず。法華経は死せる者をも治するが故に妙と云う釈なり。

されば、諸経にしては、仏になる者も仏になるべからず。その故は、法華は仏になりがたき者すらなお仏になりぬ。なりやすき者は云うにや及ぶという道理立ちぬれば、法華経をとかれて後は、諸経におもむく人一人もあるべからず。しかるに、正像二千年過ぎて末法に入って、当世の衆生の成仏・往生のとげがたきことは、在世の二乗・闡提

等にも百千万億倍すぎたる衆生の、観経等の四十余年の経々によりて生死をはなれんと思うは、はかなし、はかなし。女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切経の中に、法華経をはなれて仏になるべからず。

霊山の聴衆、道場開悟たる天台智者大師、定めて云わく「他経は、ただ男にのみ記して女に記せず。今経は皆記す」等云々。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前にして、摩竭提国王舎城の艮、鷲の山と申す所にて、八箇年の間説き給いし法華経を、智者大師まのあたり聞こしめしけ

るに、我五十余年の一代聖教を説きおくことは皆、衆生利益のためなり。ただし、その中に四十二年の経々には「女人、仏になるべからず」と説きたまいしなり。今、法華経にして「女人、仏に成るととく」となのらせ給いしを、仏の滅後一千五百余年に当たって、鷲の山より東北十万八千里の山海をへだてて摩訶尸那と申す国あり、震旦国これなり。この国に仏の御使いに出でさせ給い、天台智者大師となのりて、「女人は法華経をはなれて仏になるべからず」と定めさせ給いぬ。

尸那国より三千里をへだてて東方に国あり、日本国となづけたり。天台大師、御入滅二百余年と申せしに、この国に生まれて伝教大師となのらせ給いて、秀句と申す書を造り給いしに、「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」と、竜女が成仏を定め置き給いたり。しかるに、当世の女人は即身成仏こそかたからめ、往生極楽は法華を憑まば疑いなし。譬えば、江河の大海に入るよりもたやすく、雨の空より落つるよりもはやくあるべきことなり。

しかるに、日本国の一切の女人は、南無妙法蓮華経とは唱えずして、女人の往生・成仏をとげざる双観・観経等によりて、弥陀の名号を一日に六万返・十万返なんどとなうるは、仏の名号なれば巧みなるにはにたれども、女人不成仏・不往生の経によれる故に、いたずらに他の財を数えたる女人なり。これひとえに悪知識にたぼらかされたるなり。されば、日本国の一切の女人の御かたきは、虎狼よりも、山賊・海賊よりも、父母の敵・とわり等よりも、法華経をばおしえずして念仏等をおしうるこそ、一切の女人の御

かたきなれ。

南無妙法蓮華経と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に、暇あらば時々弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなるように申し給わんこそ法華経を信ずる女人にてはあるべきに、当世の女人は、一期の間弥陀の名号をばしきりにとなえ、念仏の仏事をばひまなくおこない、法華経をばつやつや唱えず、供養せず。あるいはわずかに法華経を持経者によますれども、念仏者をば父母・兄弟なんどのようにおもいなし、持経者をば所従・眷属よりもかろくおもえり。かく

して、しかも法華経を信ずる由をなのるなり。そもそも浄徳夫人は、二人の太子の出家を許して法華経をひろめさせ、竜女は、「我は大乗の教えを聞いて、苦の衆生を度脱せん」とこそ誓いしが、全く他経ばかりを行じてこの経を行ぜじとは誓わず。今の女人はひとえに他経を行じて法華経を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがえすべし、心をひるがえすべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

文永三年丙寅正月六日　　日蓮　花押

ほけきょう　しん　よし　名乗
じょうとくぶにん　にんにん　たいし　しゅっけ　ゆる　ほけきょう　弘
りゅうにょ　われ　だいじょう　おし　ひら　く　しゅじょう　どだつ
ちか　まった　たきょう　ぎょう　きょう
ぎょう　ちか　いま　にょにん　たきょう　ぎょう
ほけきょう　ぎょう　かた　知　疾　こころ　翻
こころ
なんみょうほうれんげきょう　なんみょうほうれんげきょう
ぶんえいさんねんひのえとらしょうがつむいか
にちれん　かおう